

2021/02/14 大齋節前主日
東京聖三一教会 マルコ 9 :2-9
司祭マリア・グレイス笹森田鶴

キリストの本当の姿

今日の福音書は主イエスさまのお姿が変わった、主の変容と呼ばれている聖書箇所です。

「六日の後」と最初にあります。今日の出来事の六日前に起こったのは、主イエスさまがご自分の十字架の死と復活について弟子たちにお話をされ、ペトロがイエスさまをわきへ連れ出し、諫め始めたという出来事でした。ペトロは主イエスさまが何を言い出すのかと驚いて、止めに入ったのです。そんなことは聴きたくもないからです。しかし主イエスさまは振り返って弟子たちを見ながらペトロを叱ります。「サタン、引き下がれ！」

その直後のお話として、六日の経過の後、今日の福音書の物語ははじまります。

主イエスさまがペテロ、ヨハネ、ヤコブの弟子三人を連れて、高い山に登られました。主イエスさまの大事な場面には、必ずこの弟子たち3人がいっしょにいます。

また山という場所は、神さまとの出会いの場でもあります。主イエスさまが大事な場面をともにするために、弟子たちとともに神さまに会いに行くのです。ここはととてもとても重要だと福音書は読者に告げます。

すると、主イエスさまの様子が変わり、服が真っ白に輝いた、その白さはこの世のものではなかった、と記されています。直訳すると、主イエスさまのお姿が「変えられた」となりますので、神さまがそのことをしてくださったということになります。すでに神さまはこの場にいてくださっているのです。

そこにエリヤがモーセと現れて、主イエスさまと語っています。これもこの世のもので

はありません。モーセは、旧約の中でも律法を代表する人物、そしてエリヤは預言者を代表する人物、天の上の人たちです。主イエスさまは、この世界だけではなく、神とともに天にも地にも生きておられる方である、それが三人の弟子たちに示されたのでした。

まるで、弟子たちに教え諭すようにこの出来事は起こります。

けれども三人は、六日前と同じように、それがどういうことなのか分かりませんでした。見ても、その出来事の本当の意味をつかめません。どう言えばよいかも分からず、ただただペトロはとっさに考えもせずに言います。

「先生、わたしたちがここにいるのはすばらしいことです。仮小屋を3つ建てましょう。」

仮小屋は家です。主イエスさま、そしてエリヤとモーセの三人を揃って、自分がすばらしいと思うままで、目の前に閉じ込めておきたいという衝動にペテロは駆られます。恐らく天上の出来事であることは分かっていますから、それをこのままにしておきたいと思いついたのです。

つい六日前、自分のイメージ通りではない主イエスさまの言葉はなかったことにしようとしたペトロが、今度は神さまからの出来事だと感じて留めおこうとしました。

良いことを保存しようとするのが、なぜいけないのでしょうか。

それは、神さまの創造の業が着々と今も積み重ねられているこの世界、神さまによって一刻一刻新しく造り替えられている営みを、自分の勝手な思いで止めようとするようになるからです。

昨日のわたしと、今日のわたし、そして明日のわたしは、神さまによって変化しています。当然、わたしの周囲にある現実も日々変

化しているはずですが。本来それは神さまのみ国の実現のための一歩であるはずなのです。

しかし、人間のエゴや執着によってこの世界を固定化し独占しようとし、自分が苦しくなくきれいで気に入ったところだけを切り取ってしまおうとつい人間はしてしまいます。それが人間の弱さであり、弟子たちのあるがままの姿です。目の前にあるはずの神さまのみ国を見ている、理解できないからです。だから恐ろしいと思いつつも、自分の良いと思うところだけ見てそれを停止させて目の前にとどめようとしたのです。

すると神さまは、雲という現象の中に登場されます。そして主イエスさまとモーセとエリヤを覆い隠します。ペテロたちの視界から、一端すばらしかった姿が消えるのです。これはペテロたち人間がどうこうできるような事柄ではなく、神の起こされる神秘の出来事であるということが示されます。

そして神さまは弟子たちに告げます。

「これはわたしの愛する子、これに聞け。」

「聞け、イスラエルよ」と、イスラエルの民は何度も神さまに呼びかけられ、また律法の朗読の際にその言葉を聞いてきました。何度もモーセを通じて呼びかけられた神さまの思い、また「神の言葉」として預言者たちから何度も告げられた神さまのみ旨は、これからはこのお方が示してくださるのです。今、神さまが主イエスさまの姿を弟子たちの前で変えてくださったという神秘の出来事の中において、それが示されたのです。

弟子たちは主イエスさまに聞くしか道はないのです。それまでこれこそ道だと何度も生涯の中で勝手に思い描いていた観念やイメージの中に留まるのではなく、また自分が安心できる場所に留まるのでもなく、神に従う新しい道を弟子たちは示されます。

この物語に一貫しているのは、弟子たちが出来事の意味をつかめずにいるということです。弟子たちがすべてを理解した、というところでこの物語は終わっていません。そこが大事なところですよ。よく分かっていないという状態ながらも、その弟子たちとともに主イエスさまが旅をし続けてくださったのです。そのことをわたしたちは今日、大切にしたいと思います。

高い山に、弟子たちを連れていっしょに歩いて登ってくださり、足も顔も埃だらけで、傷だらけで、空腹で疲れ果てた姿のキリストが、今もわたしたちとともにいてくださいます。一瞬輝きをはなつたように見えることがあっても、今弟子たちの目の前におられるキリストは泥だらけでほこりまみれの姿です。

その姿を思い起こし、わたしたちもキリストの本当の姿が分からないながらも、キリストから離れずに、ともに旅に出たいと願います。そしてキリストが山を降りられて十字架への道を歩まれていくその道筋を、今週から始まる大齋節を通してご一緒に歩みたいと願います。

父と子と聖霊のみ名によって、アーメン